

説教 『自ずと生ずる愛の実践』 山本 護牧師
聖書 詩編 51：12～14／ガラテヤ書 5：5～6

「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切(ガラテヤ 5:6)」。そもそも「愛の実践を伴う信仰」とは何か。あたかもヤコブ書が強調する実践のように聞こえる。「魂のない肉体が死んだものであるように、行ないを伴わない信仰は死んだもの(ヤコブ 2:26)」。誤読されがちな言葉遣いだが、両文書とも「人間の信仰」を計量する律法のように語っているわけではない。どうか間違えないでほしい。愛の実践が、信仰に必要な条件なのではない。キリストに結ばれた真の信仰には、自ずと愛の実践を生じさせてしまう働きがある、といった意味あいなのだ。

「愛の実践」を自ずと生じさせる信仰。信仰に自ずと湧く愛の源泉は何か。「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるもの(2:20)」。愛の源は、キリストがこの「私を愛し、私のために身を献げられた」こと。私たちは一人残らず、見逃されることなく、何の条件もつけられずに愛されている。なにしろ私たちは、ここで呼吸(霊)しているではないか。神の命の息(創世 2:7)が今、私たちを生かしているではないか。この「息(霊)」が微だ。

いただく恵みや命が皆同じなら「果報は寝て待て」でもいいのか。あるいはまた、愛の実践という立派な奉仕は俺にはできない、それでダメなら信仰はいらぬ、と開き直るだろうか。どう応じてもいいのだが、無条件で「愛され、十字架で贖われている(ガラテヤ 2:20)」ことを、何よりまず自らの真実にしてほしい。愛をいただいている真実を胸に納めている人間は、開き直ることができない。

いつの頃からか、私の心に奇妙な感触がある。あえて言葉にすれば、「借りを返していない」ような、「何か忘れ物をしている」ような感触。はたしてその感触が、愛を実践する動機になるのか。「借りを返していない」感が、愛の実践のために幾ばくかでも作用するのだろうか。キリストの愛を無償で受けていながら「借りを返していない」と言えば麗しいが、そんな筋書きだった話ではあるまい。ただ「借りっぱなし」感の微かな揺れ動きが、私をこの場から、先へ先へと押し進めている気がする。

「キリスト・イエスに結ばれている(5:6)」ことで、私たちはもうたっぷり「愛され、十字架で贖われている(2:20)」。しかしそれだけに留まらない。「わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、「霊」により、信仰に基づいて切に望んでいる(5:5)」。十字架という歴史上の一点は、あの時、あの瞬間で完了してはいない。二千年経っても私たちはキリストの十字架に出会い、その愛が私たちの内に働き、実践(5:6)を伴って未来にむかう。愛を受けた者は、霊に押し出されるらしい(5:5)。

この箇所、「あなたがた(5:2,4,7)」二人称と「わたしたち(5:1,5)」一人称の主語が混在しているが、キリスト(5:1)と霊(5:5)においては一つなる「わたしたち」であり、割礼の有無(5:6 律法)という人間の段差はなく、「キリストに結ばれての愛の実践(5:6)」も多種多様だろう。愛の実践は隠されており、聖霊に押し出されることで(5:5)、その未知が自ずと開かれる。信仰とはそうした試みを歓迎する構え。



《おまけのひとつ》

御心が聞きたい それでは旅を試してみよ 教会の教理に納められている硬直した教えではないはず
歩きながら眺めて 少しずつ変化する風景 湖面に映される逆さまの教え これらもみな神の創造